

---

# 幸せ鏡 ～猫に乗って人形を捜す旅～

Sorairo 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せ鏡 ～猫に乗って人形を捜す旅～

### 【Nコード】

N6913J

### 【作者名】

Sorairo 光

### 【あらすじ】

ある暖かな手からひよんなことで生まれた美しい鏡と人形、それは魔法の鏡となり、魔法の人形となり、二つはそれに名をつけた。『幸せ鏡』と『幸せ人形』、それはいつの日か災いを呼ぶものともされてしまい、隠された。

長い月日を経て、今、ここにあるものは……。

## 1・鏡と人形の過去

幸せ鏡は幸せ人形と共に生み出され、暖かな手から生を受け、暖かな愛情を沢山もらった。

その主人に喜んでもらいたくて鏡は幸せな姿を……その者が望む姿を映し出し、それをかなえる魔法の鏡となった。

幸せ人形は人形がもつ袋が物質的なその人の望むものをかなえる魔法の人形となった。

でも主人は決してその力を使いしなかった。

周りから見てその生活が平凡としかいえなくてもその二つの主人はすでに『幸せ』だったから。

でも主人の命は永遠ではない。

やがて老い、そして二つと別れ、二つは外の世界へと放り出された。二つは初めて自分たちの知らない外の“世界”を知る。

いつしか世界は二つを巡って戦争が起きた。

人形が物質的な願いをかなえ、鏡が物質以外の願いをかなえた。

美も地位も権力も、永遠の生や生き返るなどのこと以外はすべて。

人形は人形のほうで願いを叶えてくれる袋は人形が持たないと意味を成さない。

人形も鏡も幾度となく盗まれ、離れ離れになった。

どちらもあればすべての願いがかなう。

そう、それはきつと死者の命でさえも……。

そんな人間の考え方から何度も何度もいろいろな人の手に渡り、いつしか二つは血の色に染まっていた。

でも死者をよみがえらせる事はできない。

それは二つがよく知っていた。

それができるなら主人は自分たちの前から消えはしなかった。

でもきつと主人のことだから生きていたいから生き返ろうという願望はないのだからうけど……。

いつしか二つは隠された。  
それもバラバラに。

お互いの位置をお互いが知らず、やがて鏡も人形も忘れ去られた頃  
再び世界は巡りだす。

長い長い眠りから目覚める時……。

「あれえ、なんだろう。これ。」

最初に鏡が見つかった。

見つけたのは雌猫だった。

猫は鏡を知っていたが、“幸せ鏡”のことは知らなかった。

「ああ、なんだ、鏡か。なんでこんなところに埋まってるの？ ずいぶん汚いけど傷もあんまりついてないじゃないか。」

独り言のように言う猫。

鏡は猫に話しかけた。

「僕は人間を不幸にする鏡らしいんだ。だから人間の手によって埋められたんだよ、ずいぶん前に。」

「ふうん？ 人間は使い物にならないと知るとたとんに手のひら返すもんねえ、でも使いようによっちゃずいぶんといい思いができるよ。」

「そう猫は言いながら耳をかき、顔をこすり、背中を舐め、毛づくろいを始めた。」

「違うよ、僕が人間の願いを叶えてきたんだ。僕の名前は幸せ鏡。」

もう一つ幸せ人形って言うのがあって、僕たちは離れ離れになってしまったんだ。でも僕は動けない。ここで眠り続けるしかなかったんだ。君が来るまで。」

「シアワセカガミ？ ただの鏡とどう違うって言うのさ、それにあたいを巻き込む気？」

軽くフーと言って猫は鏡を睨む。

そして伸びをしてから鏡に近づいた。

「あら、あたいつてば本当にいい女。」

鏡の前にちょこんと座り耳の後ろを鏡の前で搔き始めた。

「やっぱり君にも願望があるのかな？」

すこしさびしそうに鏡が言うと猫は声を立てて笑った。

「願望？なんだい、それ。あたいはあたいでこの美しさがあれば満足さ。ま、人間が気まぐれにくれる餌があればもつといいけどね。」

確かにその猫は毛並みも良くシユツとした感じの細い猫でたまに青つぽく光るグレーの毛並みがとても綺麗だった。

野良猫とは思いつらいが首輪がない。

「君は、飼い猫なの？」

鏡は疑問に思っつて猫にたずねた。

## 2・猫と鏡の旅

「飼い猫お？ちよつと冗談じゃないよ、この美しさの秘訣はね、運動量にあるんだから。見てこの木登りの早さ、そして降り立つ時の優雅さ。」

猫はそう言つて飛び跳ねるように気のはり、花びらのように地面に降り立った。

そして何事もなかったかのように毛づくろいを再び始めた。

「すごいね。」

「だろ？飼い猫なんて窮屈でやってらんないよ。見てあの美しさのないことつたら。スピードはない、腹は丸い、しなやかさがなくなっちゃいないよ。」

首輪のついた猫をチラリと見たが、そこには肥えて人間が好きそうなやわらかさで丸っこい猫がいた。

「ねえ、僕は幸せ人形を探しに行きたいんだ、手伝つてくれないかな。」

「ええ？あたいがかい？まあでも、この町にも少し飽きてきたところさ、ここで出会つたのもなんかの縁なんだろう、いいさ、付き合つてあげるよ。」

そう言つて猫は背中に鏡を乗せた。

「あんた、見かけによらず重いのね。」

そついいながら落ちそうになる鏡を必死でバランスを保ち歩き始める。

鏡は人間の肩くらいまで映すくらいの大きさがある。

猫がこのまま背負つていくには少々大きすぎる大きさだ。

「…………ごめん。」

「で？人形とやらの居場所は分かつてるんだろうね。」

「それが、全然……………」

「ちよつと！しっかりしてくれよ！それじゃあたいはどこまでアン

夕に付き合わなけりやならないんだい？途中でアンタのことなんて  
放り出しちまうかもしれないよ？」

猫はこれで二度目となるフーという音と共に毛並みを逆立てた。

「ごめん、途中で放り出してくれてもかまわないよ、でも今はあり  
がとう。」

すると猫はフンと言った。いや、鼻を鳴らした。

「変わった奴。」

「そうかもしれない。」

鏡は顔のない顔で少しだけ微笑した。

「そっぴやあんだ、僕って言うけどあんだに性別なんかないだ  
ろう？なんで僕なんだい？」

「セイベツ？ああそうか、生き物にはそういうものがあるんだった  
ね、主人がそう言うてたっけ。これはね、主人が自分のことを僕マスター  
て言うんだって教えてくれたんだ。今僕がしゃべれているのは主人マスター  
のおかげかな。でも、人間には僕の声……聞こえないみた  
いだった。」

「そりや人間と話そうなんて無理な話だね、音を発することのでき  
るあたいたちの声でさえ人間にはなんて言うてるのか理解できちゃ  
いないのさ。あんだなんか音すら出せないじゃないか。」

その瞬間鏡が地面にこすれ、こつん、ズルズルという音を立てた。  
すると猫はため息をついて言い直した。

「……何かにぶつからきゃ……。」

「でもそれじゃあ変だ、どうして僕たちは話せるんだろっ？」

「さあね、きつと縁があったのさ。じゃなかったらあたいも何かあ  
るのさ。」

猫はあくびをして、あるところまで行くと鏡を下ろした。

「ああ！肩が凝った。さて、これからアンタをどう運ぼうかね。」

猫はおろした鏡を静かに見つめそしてからこういった。

「やっぱりあたいはどいつにも劣らず美しい……自分で魅  
入っちまうよ。」

といった。

鏡は表情などないが静かに苦笑した。

鏡は自分の前に広がる景色を不思議な気持ちで眺めていた。

青い空、ちゃんと見たのはいつ頃のことだろうか。

それに自然も、ましてや猫など、鏡は嚴重に保管され、いつも日のあたらなくらい警備が嚴重な地下室に常に閉じ込められていた。

人形の行方は知れないが、人形もおそらく鏡と同じ思いをしていたであろう。

あるいは、まだしているかもしれない。

ああ、平和だ、とても不思議だ。

目の前には欲望ばかりの人間ではなく、自分のことが大好きで綺麗好きな猫がいる。

猫を見たのもいつ以来だろう。

マスターがたまに遊びに来る猫を可愛がっていたのを見てからそれ以来か……。

ああ、動きたい。

どうして動きたいのに動けないんだろう。

僕はただ、マスターにほめて欲しかったんだ。

僕を巡って目の前で人が死んでいくなんて考えたことさえもなかったのに。

僕は幸せ鏡、でもマスターが死いなくなつてから僕は幸せ鏡の裏に持つ不幸せ鏡となった。

人間は噂した。

幸せ鏡も人形も確かに願いを叶えてくれる。

でもそれは自分の命と引き換えに……だ。と。

違うんだ。

違うんだ。

僕は、僕たちはただほめて欲しかった。

喜んでもらいたかったんだ。

誰かを不幸にしたかったわけじゃないのに……。

「あれアグレマン？アグレマンじゃないか。懐かしいね、どこ行ってたんだい？」

「ああ、ファツシノ、ファツシノじゃないですか。本当だ、ずいぶんと久しぶりですね。」

「また外国に行ったのかい？あんた、飼い猫と思われてるんじゃないの？」

「かまいませんよ、彼らは僕を気に入ってくれているようですし、僕もここだけではなく世界をしりたいたいですから。他にもまだ行く場所があるので、では。」

「ああ、またね。」

### 3・人形と鏡と猫

そのまま綺麗な猫は去っていく。

向こうは雄猫だったが、二匹並んでいると美形でとても絵になる。

それに、飼い猫ではなく野良だというのは誰が聞いても驚くだろう。

「綺麗だね。」

小さく鏡がもらすと毛づくろいを始めた猫は言う。

「アグレマンは人間をうまく利用しているみたいでね、まるで飼いかたが猫さ。規則正しく室内に入って規則正しくご飯を食べる。あたいはできないことをやってのけて、海外にまでつれまわされている不思議な猫。アグレマンはどっかの国の言葉で喜び、快樂とかいう意味らしくてね、あたいが呼ばれていたファツシノってのもまた別の国の言葉で魅力とか魅惑とかいう意味らしい。まああたいのことから？魅惑的で魅力十分なのは一目見れば分かるじゃないか？だからこの名前と呼ばれてやってもいいと思っただけで飼いかたにはならないが名前があってもいいと思っただけさ。」

猫は背筋を伸ばして鏡の前に座った。

「君は、ファツシノっていうんだね。」

鏡がそういうと猫は少しにやりとして……いや、顔を傾けたのが少しそのように見えただけかもしれないが、鏡を見ながらこう言った。

「あんたも、シアワセカガミって言うんだろ？」

「これからよろしくファツシノ。」

「ああ、よろしくシアワセカガミ。」

握手は交わせないにしろ、お互いよく分からないその表情で……鏡には表情も何もないが……笑いあったのだろう。

握手の変わりに交わされた猫と鏡の小さな絆。

人形はどこに眠っているのでしょうか……。

旅に出てどんなことがあるか……知るはずもない。

ただ猫はファツシノといい、その猫のファツシノはシアワセカガミをその背に背負い歩き出す。

途中カガミを背負うファツシノに背負う用の紐をくれる人や、餌をくれる人たちとであった。

途中でシアワセカガミのことを少しだけ知っている人に追い掛け回されたりした。

そんなこんなで旅が始まり、何年かが経とうとしていた。

ファツシノは手馴れた手つきで……いや、なれた感じの動きでカガミを下ろすと鏡の前に座り少しだけ嘆いた。

「ああ！もうっ！毛並みが悪くなっちゃったよ！汗で蒸れてくるし、美しさが減っていく気がしなくもないよ。でも、まあいいさ。こんなことくらいであたいの美しさはなくなったりなんかしないんだから。でも、この旅はいつまで続くんだか……」

ファツシノは独り言のように言った。

「ごめん、そしてありがとう。確実に幸せ人形には近づいてると思うんだ。僕の気持ちが悪わつくんだ。僕たちは同じ時期、同じ手によって作られたから。それに……一部装飾も同じもので作られているんだ。」

「ふうん、だから離れててもつながってるって訳？」

興味なさそうにファツシノはあくびをしてから大きな延びをするとコテツと座った。

たまに鳥を取ったりして相変わらずすばやいファツシノだが、最近はずこしばかり疲れやすくなったようだ。

昼寝時間が多くなった。

もうずいぶんと長い月日が経った気がする。

あと何日旅をすればいいんだろう。

近づいてる気がするのに、なかなか見つからない。

何故だろう……。

そしてやっと……。

ガリッ！

それは見つかった。

石のように見えるそれに鏡がぶつかったのだ。

「幸せ人形！僕だ、僕だよ！ああ、幸せ人形、今日を覚まさしてあげるからね！」

「ええ？これが人形かい？あたいはただの石にしか見えないよ。」  
掘り起こされ、石のように見えていたそれは人形の頭であることを知った。

「ん………？」

人形は鏡と猫を見た。

「あれ、幸せ鏡、お久しぶりだね。僕、長いこと寝ていた気がするよ。」

「ああ、幸せ人形！本当にお久しぶりだね、ここに僕らを知っている人間は数少ない、僕らはやっと幸せとついになる不幸せを呼び寄せると呼ばれるものではなくなっただ。」

鏡は悲しそうに、でも嬉しそうに言った。

「そうか、うん………でも、僕、眠いよ………」

猫と鏡と人形はずっとそばにいた。

そう、ずっと。

やがて猫は老い、死が迫り、ついに目も足も耳も使い物にならなくなった。

本当に最後の最後になったとき、三つは心で通じ合った。

「ファツシノ、君に願いはあるかい？」

「なんだい？お前達、声を合わせて。」

「長生きしたいとか、何かないの？僕達のこの力も最後の気がするんだ。」

「そしてこの力がなくなったとき、僕らは壊れる。そうだよ、幸せ鏡。」

「幸せ人形もそう思う？じゃあやっぱりそうなんだ。」

「あたいに願いなんてないさ、長生きしたいなんて思わない。命は散るのが当然なんだよ。あたいはあたいの人生に満足してるのさ。」

あんたらも人生を満喫するんだね。幸せ何とかがって名前なんだから、幸せになんな。誰かのためにどうしようなんて考えなくていいのさ。

それは、かつて二つの主人マスターであつた人間が言つた言葉と同じだつた。鏡も人形も驚いてから悲しそうに、でも嬉しそうにその泣けない容姿で見えない涙を流した。

『ああ、幸せ鏡、主人はここにいたんだね。』マスター

『そうだね、幸せ人形、長い月日をかけて、主人は生まれ変わつて、こんなにも近くにいたんだね。』マスター

『どおりで懐かしいと思つたわけだ……。あたいもあんた達に会つてたのか。じゃあ言葉が通じるはずだね。』

猫はほんのり動かない筋肉を使つて微笑むと、猫は天国に旅立つた。鏡も人形もその心のすべてが幸せに包まれて、ピシピシ、パリン……。！

音がしたと思うと壊れて猫の魂と共に天国へと登つていった。残つたのは汚らしい鏡や人形の壊れた破片と美しかった頃は微塵もなくなつた猫の骸だけだつた。

人間がそこへ来て、チツと舌打ちをすると、猫も鏡も人形もすべての残骸が一つのゴミ袋にまとめられ捨てられてしまつた。

三つの魂、いっどこで今度はどんな形で出会うのだろうか……。  
・そんなこと知るはずもない。  
分かるはずもない。

でも、もつどこかで出会っているかもしれない。  
その魂はあなたの中に、そして私の中に、それ以外にもあるかもしれない。

また、出会えることを願いながら ……。

### 3・人形と鏡と猫（後書き）

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6913j/>

---

幸せ鏡 ～猫に乗って人形を捜す旅～

2010年10月10日04時28分発行